

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 土居宮から浄願寺山麓を歩く

講師 溝渕茂樹

(高松市歴史民俗協会事務局長)

平成22年3月14日(日)

共催 高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

1 坂田郷

承平年間（931年～938年）に源順が著した和名類聚抄（和名抄）わみょうるいじゆしやうに佐加多という郷名が現れています。坂田郷に比定される現在の西春日一帯の土地は、北は石清尾山や室山、西は浄願寺山や小山に囲まれ、かつては香東川の流れであった御坊川や清水川の流域に平地が広がっています。

地図を広げるとその地形は、峰山と浄願寺山の山裾を旧香東川がぶつかり次第に流域が東に移ったような様相であり、流れが東に片寄るに従ってその間に後背湿地が形成された地形に見えます。今でもその中を一宮方面から延びる昔からの狭い農業用水路が、今でも家が重なり合う土地の間を細々と流れています。かつては、その水が豊かな水田を潤していたのでしよう。

この地の歴史は古く、4～7世紀には石清尾山や浄願寺山に多くの古墳が造られ、8世紀の奈良時代には坂田廃寺が建てられ、仏教文化が花開きます。9世紀に書かれた「日本にほん靈異記」りやういき（注1）には坂田の里、綾君が登場します。もしかすると、坂田廃寺の一帯がその舞台かもしれませぬ。

そして平安時代初期に真言宗再興の貢献者で、弘法大師信仰の基礎を打ち立てた僧観賢は、坂田郷秦氏の出身とされています。その後の南北朝時代のはじめ、足利方の細川氏が

拳兵した土地ともいわれています。江戸時代になると坂田郷西春日は、香西方面からの高松城に向かう主要な進入路になりました。というのも、高松城が築城された土地は石清尾山塊から北の海に突き出した砂洲でした。したがって西からの道は現在では郷東川橋があるが当時は海であり、行き来もできず、迂回し鶴尾神社の南側、浄願寺山と石清尾山塊の間の切通しをたどりました。その切通しは今、新しい道路の建設工事が始まっています。明治23年（1890年）2月、沖・勅使・坂田・馬場・万蔵の5か村が合併し鷺田村となり、昭和15年（1940年）2月には高松市に編入され、紙・上天神・三条・田村・勅使・西春日・西ハゼ・東ハゼ・松並・峰山・室・室新の12町が誕生しました。

（注1）『日本霊異記』

にほんこくげんほうぜんあくりょういぎ
日本国現報善悪霊異記は、9世紀の平安時代初期に漢文で書かれた日本最古の仏教説話集で、『日本霊異記』と呼ばれています。著者は奈良薬師寺の僧景戒です。

仏教の教えを判りやすく具体的に示すエピソードが多数おさめられており、物語の時代背景は、大和時代から平安時代までで、聖徳太子、行基の話、勧善懲悪、霊験、転生や当時の庶民生活と仏教との関わりなどが生き生きと描かれています。

【布施しなかったことと、放生ほうじょうしたことによって、この世で善悪両様の報いを受けた話】

の中に坂田の里綾君の話が記載されています。

2 観興寺 法照山悉地院

真言宗御室派 本尊 不動明王

観興寺は栗林公園南端に隣接し、すぐ近くの中央通りを多くの車が通っていますが、紫雲山のすそ野に立地しているため落ち着いた雰囲気の場所で、高松大空襲の戦火からも逃れ、堂内には平安時代後期から江戸時代に造られた仏像が今に残っています。その中でも像高99・2センチ檜材寄木造りの阿弥陀如来立像（高松市指定有形）は平安時代末期の作で、丸みを帯びた肩部、うすい



観 興 寺

胸、彫りの浅い衣文線、足首までの衣の裾、温和な面相部などの定朝様

(注2)をよく示しています。

観興寺は栗林公園とのつながりが強く、江戸時代には藩主の祈願所として栄えていました。公園南西には寺と公園を結ぶ不動口門があり、その場所から藩主が寺を訪ねたと思われれます。また、本尊不動明王について次のような由来が伝えられています。

伊予の河野四郎守が戦乱に会い、本尊不動尊を背負い讃岐に落ち延びて来ました。そしてこの地に草庵を建てて安置していましたが、天正13年(1586年)に大地震があり、室山が崩れて草庵が埋もれてしまいました。その後、年月が過ぎましたが、山に登ると焔光がかかるのを村人が発見し、草庵が埋まったところを掘ると不動尊が出てきました。そこで、草庵を再び建ててこの像を安置したといわれています。(当時の不動尊はその後焼失)



観興寺 阿弥陀如来立像

(注2) 定朝様

藤原時代に、日本史上屈指の仏師として名高い定朝じょうちゆうによって、和様と呼ぶにふさわしい仏像彫刻の型が完成され、穏やかで優しい姿をした『定朝様式』といわれる仏像が数多く作られるようになりました。また定朝は従来の一本の木を素材とする「一木造」から、数本の木を組み合わせて造る「寄木造」の手法を生み出し、一度に多くの巨像造りが可能になりました。これは運搬にも便利であるという画期的なものでした。

3 観賢上人

観賢上人は、真言宗の高僧で、香東郡坂田郷（現高松市西春日町あたり）の秦氏出身です。真言宗の僧である聖宝（理源大師）に見出されて上洛し、真雅（法光大師 空海の実弟）にも仕えました。般若寺（奈良）を開き、般若寺僧正と呼ばれました。聖宝没後に東寺長者となり、さらに醍醐寺初代座主、高野山検校、仁和寺別当を兼ね、学徳一世に高く、文殊の化身とも言われました。空海没後80年を経て、東寺派と高野山金剛峰寺派に二分されて衰退しかかった真言宗の再興に貢献しました。また、空海への大師号追贈に力を尽くし、高野山奥院の廟前に報告、大師入定留身説にゅうじょうるしん（注3）を唱え弘法大師信仰の基礎を固めました。

(注3) 入定留身説

弘法大師空海は62歳で亡くなりました。通常僧侶の死は入滅、入寂などと表現されますが、空海に限っては入定の語が用いられます。入定とは空海が和歌山県高野山の奥の院の御廟において、即身成仏をし、禅定に入っていることを意味しています。弘法大師は現在もこの世に肉身を留めて、56億7000万年のちに弥勒菩薩がこの世に出現するまでの間、衆生救済のために精進されているという信仰です。大師の入定留身信仰に伴って、高野山では毎年、旧3月21日の正御影供しょうみえいこに衣替えの法要が営まれています。

《聖宝と観賢の出会い》

観賢は、秦氏の出身で、幼名を阿古磨あこまろといい、その才能は、讃岐国出身の僧聖宝（理源大師）に見出され、花開きました。聖宝は、師の真雅（法光大師 空海の実弟）の怒りにふれて勘当され、故郷の讃岐に身を寄せて修行の旅を重ねていたとき、坂田郷で手水ちようずをおうと思ひ、遊んでいる子供たちに尋ねると、1人が案内しようと立ち上がり、他の1人が、「あの水は不浄だから洗っても無駄です。」といました。聖宝は、「仏の道でいう諸法では、浄、不浄の区別はないから、かまわない。」といいながら水の方へ行こうとしたそのとき、阿古磨は「諸法に浄・不浄がないものなら、お坊様はなぜ手の不浄をお洗いになる

のですか。」と尋ねました。聖宝は阿古麿が神童であることを見抜き都に連れ帰りました。貞観4年(862年)阿古麿9歳の時でした。聖宝は仁和寺に身を寄せて、昼は托鉢をしながら、阿古麿を養い、夜は学問を教えました。阿古麿は聖宝の師真雅の教えも受け、東大寺で得度して観賢と名乗りました。

4 鶴尾神社

祭神 ほんだわけのみこと 誉田別命 うじのわきいつらこのみこと 菟道稚郎子命 おききながたらしひめ
のみにこと 命 のみにこと 息気長足姫

峰山南山麓、奥の池の西南に鎮座。大同年間(806年)810年の創祀とされています。

古来、坂田一郷の氏神で坂田氏一族がその祖先の応神天皇(誉田別尊)を祀ったといわれています。『讚岐国名勝図会』(1854年刊行)には一説として「元慶三年(879年)空から神影が降るかのようにみえたのが鶴の羽であったので、鶴尾八幡宮と号した」とあります。仁和年間(885年)889年には、国司



鶴尾神社 4号墳

菅原道真が現在地の南東土井原に移し、土居宮どいのみやと称したとも伝えられ、現在も土居宮とよぶことがあります。

神社の後、丘陵の稜線上にある鶴尾神社4号墳は、前方部が北方に、後円部が南方にある積石塚古墳で、南の後円部には、竪穴式石室があり、全国でも最古級の後円墳の1つであり、当然坂田の人々もその築造に加わったことでしょう。なお、現在、後円部の崩壊を防ぐための工事が始まっています。

5 観賢山久米寺 観賢堂

旧国道32号線の西ハゼバス停に並行して、東側を走る昔のこんびら街道にはさまれたところに観賢堂があります。このお堂の周囲には「観賢御廟」「弘法大師剃刀塚」の石碑が建っています。

剃刀塚は、空海没後86年目の延喜21年（921年）に大師号追贈報告のために、観賢僧正が高野山の霊廟を開いた



剃 刀 塚



観 賢 堂

際、伸びていた空海のヒゲを剃ったという剃刀を讃岐に持ち帰り、埋めたのがこの塚だといふことです。

6 祥福寺

祥福寺は江戸時代、初代高松藩主松平頼重公に招かれた鶴洲和尚が開山した寺院です。享保11年（1726年）二代藩主頼常の時に禅宗の一派である黄檗宗本山満福寺の末寺として創建された後、曹洞宗に改宗しました。五百羅漢寺とも称され、民衆の信仰を集めました。太平洋戦争の高松大空襲で焼失。昭和42年（1967年）に高松市宮脇町から現在の地に移転、昭和63年（1988年）に伽藍を再興して今日にいたっています。曹洞宗の認可参禅道場として、坐禅会を主催しています。

7 生目神社

九州宮崎にある生目八幡宮から勧進され、



生 目 神 社

悪七兵衛景清あくしちべいかげきよをお祀りしています。俗に「いきめさま」と呼ばれていますが、正式には「いきめさま」です。祥福寺の駐車場から墓地横を通り、更に奥へ進んだ所に社殿が建っています。古くから眼疾に靈験あらかたと伝えられ、「眼をひらく」ことから転じてよろずの願いがかなうお社として信仰されています。

祭神の屋島合戦「鍛引き」(注4)で有名な悪七兵衛景清(藤原景清)は、武勇の者として名を馳せました。源平の合戦で敗者となった平家の武将景清を、源頼朝は自分の家来として召し抱えたいと思いますが、景清はその申し出を断って、西国に流してくれるようにと願いました。日向の国に落ち着いた景清ですが、源氏の隆盛を見聞することにより煩悶し続け、その苦しさから逃れるために、自分で自分の両眼をえぐって空に投げました。両眼は生目の地の松の木(目掛けの松)にまで飛んで行きました。その両眼を、目の神様として祀ったのが生目神社(宮崎市)です。県下でも数少ない神様です。

(注4) 鍛引き

平家物語巻十一、屋島合戦が描かれています。那須与一扇の的が終わった後、与一が老兵を射たことで再び戦闘が始まり、悪七兵衛景清の「鍛引き」「義経の弓流し」へと続いていきます。

「楯の陰より、長刀ながなた打ち振てかかりければ、美尾屋十郎、小太刀、大長刀に叶はじとや思ひけん、かいふいて逃げければ、やがて続いて追っかけたり。長刀にて薙ながんずるかと思ふ所に、さはなくして、長刀をば弓手ゆんでの脇にかい挟み、馬手めでの手をさし延べて、美尾屋十郎が甲の鑢を掴まうとす。掴まれじと逃ぐる。三度掴みはずいて、四度の度、むずと掴む。しばしぞたまつて見えし。鉢附はちつけの板より、ふつと引き切つてぞ逃げたりける。残り四騎は、馬を惜うで駆けず、見物してぞ居たりける。美尾屋十郎は、御方の馬の陰に逃げ入つて、息続き居たり。敵は追うても来ず。そののち甲の鑢をば、長刀の先に貫き、高く差し上げ、大音声を挙げて、「遠からん者は音にも聞け。近くは目にも見給へ。これこそ京童きょうわらひんの呼ぶなる、上総の悪七兵衛景清よ」

鑢引きの場面は、悪七兵衛景清が美尾屋十郎の鑢を引きちぎる瞬間を、息もつかせぬスピード感で描いています。平家物語12巻中数々あるエピソードの中でも軍記物語の真骨頂と言えます。

8 片山池窯跡群

積石塚古墳群として名高い石清尾山古墳群が所在する石清尾山塊のうち、浄願寺山と小山の間の谷間に立地する片山池窯跡群は、坂田廃寺とともに昭和初期からその存在が知ら

れていました。昭和16年（1941年）には1号窯跡の発掘調査が行なわれ、部分的ながらも窯跡遺構であることが確認されています。さらに数基の窯跡が周辺に存在していることが指摘されていましたが、現在では確認することができず、開発によって滅失したものと考えられています。

平成6年（1994年）には高松市教育委員会によって1号窯跡の全面的な発掘調査が行なわれました。その結果、窯は南向きの斜面を掘りくぼめて、築かれています。半地下式有牀（ロストル）式平窯と呼ばれるもので、出土遺物より平安時代のものと考えられています。窯の構造は焼成室と燃焼室に分かれ、焼成室奥には平瓦が10数枚立てかけられており、当時のままの姿をとどめています。

出土遺物の中には窯の築造年代より遡って、白鳳期（飛鳥時代後半）の鴟尾しび（注5）の破片や、坂田廃寺から出土した瓦と同範の軒瓦などがあります。岡山県邑久郡牛窓町にある寒風古窯跡群から出土する鴟尾さぶかぜと類似しており、その関係が注目されています。

（注5） 鴟尾

瓦葺屋根の大棟の両端につけられる飾りの一種で、訓読みでは「とびのお」と読みます。沓くつに似ていることから沓形くつがたとも呼ばれ、飛鳥時代からすでに鴟尾が作られており、飛鳥寺



八葉複弁蓮華文軒丸瓦
(坂田廃寺出土)



鴟尾
(片山池 1 号窯跡出土)

から古いタイプのもので出土しています。白鳳時代の鴟尾には胴部に珠文帯を設けたり、腹部に蓮華文を飾ったり装飾性が豊かなものとなります。中世になると魚形に変化してしやちほし鯨になりました。



片山池 1 号窯跡

8 坂田廃寺

古墳が造られなくなった白鳳期（飛鳥時代後半 7世紀後半）に瓦を葺いた壮麗な建物が浄願寺山の東麓に建てられました。寺名は不明のため、地名をとって坂田廃寺の名前で呼ばれています。

我が国に仏教が伝わった飛鳥時代から国分寺の建立された奈良時代までに建てられた寺院を古代寺院と呼び、当時建てられた讃岐17カ寺院のうちの1寺と言われています。

高松平野には古い寺院跡は不思議と少なく、坂田廃寺はその古い寺院跡の一つです。

坂田廃寺跡は、戦前から古瓦の出土などで、知られていました。昭和39年（1

964年）3月、推定地内の畑地から白

鳳期の金銅誕生釈迦仏立像（県指定有形

県立ミュージアム蔵）が発掘され、次い

で、同42年（1967年）に行なわれ

た発掘調査では、基壇や円形柱座の造り

出しのある礎石数個、白鳳期と思われる

はちようふくべんれんげものきまるかわら
八葉複弁蓮華文軒丸瓦や大量の古瓦が



金銅釈迦誕生仏立像

出土しました。この場所で古代仏教文化の開花が明らかになり、また、近くで平安時代の瓦窯跡が発掘されました。礎石は現在、天理教の建物の入り口を入った右側に高松市の文化財の看板を立てて保存されています。なお、御坊町所在の無量寿院が坂田廃寺の後身とも伝えられています。

【参考文献】

『高松市史』昭和39年12月15日発行 高松市役所

『香川県の地名』1989年2月23日発行 平凡社

『第11回特別展讃岐の古瓦』平成8年1月発行 高松市歴史資料館

『わが町の文化財探訪』平成19年3月31日発行 高松市文化財保護協会

『片山池窯跡群く確認調査報告書』2009年3月発行 高松市教育委員会

『讃岐人物風景 古代の名僧と宰相』昭和55年9月10日発行 四国新聞社

『香川県の地名』1989年2月23日発行 (株)平凡社

『わが町の文化財探訪』平成19年3月31日発行 高松市文化財保護協会

『祥福寺ホームページ』『日本霊異記』平成7年9月10日発行 小学館



坂田廃寺 礎石